

# 大学教育にコロナ禍が

もたらしたものは

「コロナ禍で変化したこと、変わらないこと」

## MEMBER

内村直尚

久留米大学学長

篠原聡子

日本女子大学学長

真銅正宏

追手門学院大学学長

大西晴樹

東北学院大学学長

司会  
松田美佐中央大学文学部教授、  
広報・情報委員会大学時報分科会委員

## 5類移行後の大学の在り方とは

松田 これまで3年余りにわたり猛威を振るってきた新型コロナウイルス感染症は、2023年5月8日をもって、感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律上の5類感染症に移行しました。これに伴い、文部科学省からは各種通知が発信され、感染対策については個人や事業者の主體的な選択を尊重し、自主的な取り組みとすることとなりました。各大学においてはすでにガイドラインや行動基準等を定め、学生や関係者への周知、具体的な取り組みを進めている状況ですが、コロナ禍前とほぼ同様に戻すだけでなく、コロナ禍の経験を踏まえてそのメリットを継続して生かしていること、以前であれば想定もしなかった新たな在り方に気付かされたことなどがあると考えられます。各大学ではこの3年余りの間、それぞれに行動基準、BCPなどに基つき、各種判断と対応を重ねながら現在に至っているかと思えます。

今回の座談会では、アフターコロナの第一歩として、コロナ禍で変化したこと、変わらないこと、新たな気付き等について、現時点での記録として整理・共有し、今後の大学

教育の在り方を展望する機会としたいと思います。では、最初に5類移行を受けて各大学で決定された方針やその背景について伺いたく思います。

## 通常通りを目指しつつ 感染対策にも配慮

**内村** 久留米大学学長の内村と申します。本学は文学部、人間健康学部、法学部、経済学部、商学部、医学部の6学部で構成され、約7千人が学ぶ総合大学です。コロナ禍における方針決定は、学長、副学長、6学部の学部長から成る教学マネジメント会議が主導していました。毎月、会議を行って、そこでの決定を全学で共有するという形です。医学部については病院を併設しており、患者に感染する可能性もありましたので、独自に厳しい基準を定めていました。文系学部は医学部とキャンパスが離れていることもあり、独自の感染対策をとる形としました。

5類に移行してからは授業や実習は原則的に対面で行っています。ただ、従来は1つの教室で行っていた授業を



2つの教室に分けるなど、現在も少しでも3密を避けるための工夫は続けています。対面授業が再開されて実感したのは、学生生活において、いかにコミュニケーションが重要かということです。授業だけでなく、部活動やボランティアを通して人と出会う場を学生に提供することも、大学の大きな役割であることをひしひしと感じています。

**篠原** 日本女子大学学長の篠原と申します。本学は、家政学部、文学部、理学部、人間社会学部に加え、国際文化学部が新設され、大学院も含めて約6500名の学生が在籍しています。女子大学としては規模の大きな総合大学と言えるでしょう。本学では5類移行後、授業の体制や感染対策などは、ほぼコロナ禍以前の状態に戻しました。その一方で、コロナ禍で普及した遠隔授業を一部の授業では引き続き実施しています。今後も教育効果を考慮しながら、遠隔授業を取り入れていこうと考えています。感染対策については、各建物の出入口の消毒液設置や換気対策等、一部については引き続き行っています。食堂等に継続して設置していた飛沫防止パネルは、今夏に全て撤去しました。また、外部の方の見学については、図書館のみ見合わせていましたが、8月から受け付けを再開しました。内村



学長がおっしゃったように本学でも3密を避けるため教室の定員を7割に抑えています。次年度以降は通常体制に戻すことを検討しています。

## 活気を取り戻しつつある キャンパスライフ

**真銅** 追手門学院大学学長の真銅と申します。本学は大阪にある人文社会科学中心の私立大学です。2023年に法学部を設置し、合計8学部となり、約8千人の学生が在籍しています。本学では5類移行を待たずに、マスクの着用が任意になった4月1日から、基本的に全て通常の体制に戻しました。ただ、コロナ禍の間に教育や働き方におけるDX化が進み、学生や教職員の意識も大きく変わりました。それを生かすべく、15%ほどオンライン授業を残したり、職員のテレワークを継続するなど、取り組みを続けています。

**大西** 東北学院大学学長の大西と申します。本学は仙台にある私立総合大学で、2023年4月から9学部15学科という体制になりました。以前から計画されていたこと



大西 晴樹氏

ですが、教養学部を発展的に解消して新たに4つの学部を新設したのに加え、郊外型のキャンパスを廃止して土樋キャンパスの近くに都心型の新キャンパスを開設しました。その一方でコロナ禍でも変わらないことがあるのに気が付きました。本学はプロテスタントの大学ですので、大学礼拝を実施しているのですが、新1年生が礼拝に参加している姿をよく見かけられるのです。コロナ禍により大学礼拝の伝

統が途切れてしまうことを危惧してはいたのですが、建学の精神が連綿と受け継がれていることを喜ばしく感じました。また、新1年生は高校3年間、コロナ禍で活動が制限されていた反動があるのか、部活動やサークルは2021年度に比べて2倍近くの部員・メンバーを獲得できたと言われています。また、歴史のあるサークルが途絶えてしまった一方で、eスポーツなどの新しいサークルが次々に立ち上げられているなど、5類移行後のキャンパスライフに学生が大きな期待を寄せていることを実感しています。

## オンラインのメリットとメンタルケア等の配慮や対策

**松田** オンライン授業を継続されているというお話も出ましたが、授業やゼミ合宿など正課において、特に印象に残っている変化や5類移行を受けた新しい取り組みがありましたらお聞かせください。

**内村** 授業に関しては、オンデマンド型を取り入れたことで聴き逃した箇所や大事な箇所を復習できるようにな

り、学習効果が高まったと思います。学習意欲の高い学生はそれを活用して学びを深めていくのですが、その一方でオンデマンド授業をうまく活用できない学生もおり、学生の成績の二極化が以前よりも顕著になりました。対面授業の場合は学生たちが支え合って学んでいましたが、オンライン化することで、そのつながりがなくなって孤立化してしまい、成績が振るわなくなっていく学生が出てくるという、新たな課題が浮かび上がってきたのです。孤立化した学生は、対面授業が再開されても授業に参加できないケースが多いようです。特に発達障害がある場合など、オンライン授業が受講形態として適していた学生は、対面授業に出席することに大きな困難を抱えることがあります。そのため、オンライン学習支援も含めた合理的配慮を行ってサポートしていきたいと考えています。

**篠原** 本学でもオンデマンド授業は大きな変化をもたらしました。本学は2021年に4学部を目白キャンパスに統合したため、大人数の授業で教室を確保するのが難しくなり、基盤教育では人数的な制約から受講者を抽選で決めざるを得ない授業もありました。しかし、コロナ禍を受けてオンデマンド授業を実施したことにより、多くの学



真銅 正宏氏

生に希望する授業を受けてもらうことができるようになりました。また、演習や大学院の授業では、オンラインで海外の先生を招いて特別講義を行ったり、ワークショップを開催したりするなど、オンラインを活用した多面的な取り組みができるようになり、ポジティブな側面もありました。一方で、2020年の前期に入構制限を実施したことで、不安を抱えてメンタルの不調を訴える学生が増え、カウ

セリングセンターにも多くの相談が寄せられました。対策としては、グループに分けて入学式の代わりになるイベントを実施して対面の機会を作ったり、学生同士で気軽に相談し合えるピア・サポート制度を作ったりしました。5類移行後も一部授業ではオンライン授業を残していますが、教育効果を観察し、学生のアンケートも参考にしながら今後の方針を決めていきたいと思っています。感染から学生を守ることも、大きな気付きでした。

## コロナ禍により DX化が大きく進展

**真銅** 本学では2019年に新キャンパスを開設したのを機に、学生全員に個人所有のパソコンを持参させる「BYOD(Bring Your Own Device)」を実施しました。それにより、コロナ禍となつてからスムーズにオンライン授業に対応することができました。また、2015年からLMS(Learning Management System：学習

管理システム」を導入しており、オンライン授業を開始したと同時に同システムを通じて資料配布などを行うことができました。2019年からは、電子図書館サービス「Librarie(ライブラリエ)」を導入したのですが、サービス開始当初は1カ月のログイン回数が100回を下回る時もありました。しかし、コロナ禍となった2020年5月にはログイン回数が4千回を超えるなど、利用率が大きく高まっています。このように、コロナ禍によって教育DXが推進されたことは、大きなメリットだったと感じています。

**大西** 本学ではコロナ禍で本格的にオンライン授業に移行するに当たり、すでに導入していた教育支援サービス「manaba(マナバ)」の講習会を開催しました。続いて「Zoom」も早急に契約し、オンライン授業を実施する体制を整えました。喜ばしいと感じたのが、若手の教員を中心にサポートチームが結成され、ベテランの教員をサポートする動きが生まれたことです。それにより、スムーズにオンライン授業に移行することができました。このサポートチームは、翌年にはDX推進委員会という正式な組織に昇格し、大学のDX化に大きく貢献してくれています。こうした成果を生かすべく、現在も全学共通科目の

大規模講義はオンデマンドで実施しています。

## オンラインを活用して 課外活動の継続を支援

**松田** 部活動やサークル活動、ボランティア活動といった



篠原 聡子氏



課外活動、また留学のような教育活動についても各大学で試行錯誤しながら対策を進められてきたことと思います。コロナ禍において課外活動に関して具体的にどのような対策を講じてきたのか、それが5類に移行した現在、どのように変化しているのかお聞かせください。

**内村** 5類に移行してからは、課外活動は原則的にコロナ禍前と同じ状況に戻りました。体育会系・文化系を問わず積極的に参加する学生が増えており、人との交流を求めているのが見てとれます。今年7月に九州は豪雨災害に見舞われましたが、復興のボランティアに参加する学生も多いようです。留学に関してはコロナ禍でも、オンライン留学のような形で国際交流ができる体制を構築できました。また、就職活動についてもオンラインでの学生支援を充実させることができました。そうした点では、コロナ禍がプラスに働いた面もあると思います。

**篠原** 文化系サークルの活動に関しては、オンラインを活用しながら活動を継続し、対面での活動が必要な場合は届出を出してもらい、感染対策等の内容を判断した上で認可を出していました。体育系サークルは、緊急事態宣言中はほぼ自主練習のみになりましたが、オンラインでつなが



りを保ちつつ勧誘活動を行い、部員の獲得にも成功したようです。また、2021年に本学は創立120周年を迎えました。本来は500人程度が集まるイベントを開催する予定でしたが、200人ほどに参加者数を縮小し、併せて動画を配信する形に変更しました。それに合わせて、学生にキャンパスライフを楽しんでもらって元気づけたいという思いから、「泉会」という保護者の会から支援をいただき120周年を記念した学生のイベントコンテストを実施し



内村 直尚氏

ました。華道部がホールいっばいに花を生けたり、協定校であるスウェーデンのウプサラ大学との交流をさらに深めるためのイベントを開催したりと、学生も120周年を盛り上げてくれました。このイベントコンテストは、それ以後も異なったテーマで続いています。

**真銅** 課外活動に関しては、リスク管理委員会において対策を立ててきました。体育会系の部活動では強化クラブを

中心に「ONE TAP SPORTS (ワンタップスポーツ)」というデータプラットフォームを採用しました。毎日の体調やトレーニング状況、誰と15分以上話したかなどさまざまなデータを記録できるシステムです。それを活用してクラスター発生の予防に努めました。非常に有用なので現在も使い続けています。コロナ禍がなければそうしたツールがあることにも気付かなかつたかもしれません。

**大西** 本学では、課外活動においてもできるだけ大学を開放するようになってきました。感染拡大防止に配慮しつつ、施設での個人練習を許可するなど、なるべく活動を妨げないようにガイドラインを制定しました。そのかいあってか、今年は運動部が試合で活躍を見せています。留学に関しては、コロナ禍では海外の協定校と「ONLINE MEETUP」というオンライン交流会を開催しました。今年の4月からは受け入れ学生数はコロナ禍前と同水準に戻りましたが、派遣学生数は半分以下にとどまっています。かなり積極的な後押しをしないとなかなか元には戻らないでしょう。

## オンライン授業を 教員のFDにつなげる

**松田** 5類に移行した後も、コロナ禍は大学の運営や危機管理意識にもさまざまな影響を与えているかと思いますが、具体的にどのような変化が起きたのか、また地域における大学の在り方がどのように変容したのかお伺いしたいと思います。

**内村** コロナ禍により大学運営においてさまざまな変化がありました。授業の在り方にも大きな影響を与えました。オンライン授業をせざるを得なくなったことで、教員それぞれが授業に対してこれまで以上に綿密なプランを立て、教える範囲をしっかりとめて、責任を持って配信してくれるようになりました。オンライン授業が教員の「FD (Faculty Development)」につながったわけですね。また、大西先生もおっしゃったように、若手教員がベテラン教員のサポートに回ることで教員間の連携がより深まったことも、大学運営にプラスに働いています。本学は地域に貢献することを一つのビジョンとしていますから、コロナ禍でも積極的に地域での活動に取り組みしました。大

学病院では外部の団体にもワクチン接種を実施しましたが、その際、地域との交流を深めるべく、学生にもボランティアとして参加してもらいました。今後の展望で言いますと、コロナ禍で進んだDX化をいかに継続していくかが大きな課題だと考えています。また、今後起こり得るであろう感染症の発生や災害に対して、大学全体をどう管理していくかということ、今回のコロナ禍の教訓として考え、危機管理意識の向上につなげていきたいと思っています。

**篠原** 本学では個別の学生に対するケアを担当する組織として、保健管理センターとカウンセリングセンターを設置しています。新型コロナウイルス感染症に罹患したり体調不良を訴えたりする学生には、保健管理センターに届出を出してもらい、学科長とアドバイザーが情報を把握するという体制をとっています。また、メンタルヘルスケアに関してはカウンセリングセンターが中心となり、専任教員のアドバイザーと連携をとりながら、学生を直接ケアする体制となっています。先ほど、学生同士が支え合うピア・サポート制度についてお話ししましたが、現在、ピア・サポーターになりたいとの熱意を持った学生が多くいます。「傾聴」「コミュニケーションスキル」などに関する養成講



座を受講したピア・サポーターが続々と育っていますが、今後は個別のメンタルヘルスケアだけでなく、履修登録や就職活動のサポートなど、役割をさらに拡大してもらおうと考えています。

オンライン授業についても継続的な取り組みを行っています。本学では毎年、グッドプラクティスをシェアするために、「教育賞」という賞を優秀な授業をしている教員に対して授与しています。コロナ禍以降は、オンライン授業に取り組む教員に対して積極的に授与するようにしています。そして表彰された教員から他の教員にレクチャーをしてもらい、FDにつながるという形をとっています。また、通常の対面授業でも一部、遠隔授業の形態を取り入れることができる運用を行い、その実施方法について明確にシラバスにまとめて事前に学生に周知しています。現在も一部はオンライン授業を実施しているため、キャンパスに来てオンライン授業を受ける学生も増えています。そのため、新しくキャンパスを整備したのを機に、学生が授業外で学習できるラーニング・コモンズを複数設置しました。Wi-Fi環境も整っていることから非常に好評で、多くの学生がそこに集まって授業を受けています。また、教員側としては、

コロナ禍以前よりすでに導入していたLMS「manaba」といったシステムの活用が進み、システム上で出席や課題を管理するようになり、学生へのフィードバックにも生かされています。また、「Zoom」や「Teams」を使って会議を行い、資料もクラウドで管理するようになり、コロナ禍によりWi-Fi環境の整備や会議のオンライン化、ペーパーレス化が同時に一気に進むこととなりました。

## より地域に根ざした大学へ

**真銅** 本学では、コロナ禍には迅速かつ臨機応変に対応する必要があると考え、学長、副学長と関連部課長に人員を絞ったリスク管理委員会で方針決定を行いました。緊急時だからこそ迅速な意思決定が必要であり、他の教員にも協力いただき、問題なく運営できました。一方で、組織がいかに縦割り化されていたかということに気付かされました。それを教訓に、学生のためのコロナ対策ヘルプデスクというワンストップのチームを立ち上げたほか、事務組織もワンストップ化すべく、急速に改編を進めていると



松田 美佐氏

ころです。私個人としても、コロナ禍をきっかけに積極的に発信を行うようにしました。学生に向けて週1回、「学長メッセージ 言伝」と題して自分の言葉でメッセージを送ることにしたのです。1年間で40回のメッセージを書きましましたが、2021年にはそれを1冊の本にまとめていただきました。現在も発信を継続しています。コロナ禍により、教職員の働き方も大きく変わりました。テレワークには、



ペーパーレス化が必須となりますが、本学では稟議や決裁などのプロセスを全て電子化しています。他にも、資料などのファイルも全てクラウド上に保管するなど、教職員がテレワークをしやすい環境を整えました。こうしたシステムを導入してみると実際、非常に使い勝手が良く、教職員からも好評を得ていますので、今後もさらに充実させる方向で考えています。

地域貢献に関しては大学に課せられた使命と考え、食堂や図書館の開放といった基本的なことには、早くから取り組んできました。地域との交流という点では、昨年、学園祭を開催して2日間で1万人近い来場がありました。やはり地域においてそうした交流の場が求められていることを実感し、今後はより広く開放して規模も大きくしていくと学生に話しています。

**大西** コロナ禍が本格化する直前の2020年1月に文部科学省から「教学マネジメント指針」が出されました。教育成果の可視化などの指針に沿った大学運営を行うには、オンラインが不可欠だと感じていましたが、くしくもコロナ禍が重なったことでオンライン環境の整備が大きく進みました。これからの教育研究の在り方を考えた時に、

「教学マネジメント指針」があったからこそ中身のあるオンライン化が実現できたのではないかと思えます。大学運営に関しては、コロナ禍を受けて大きな進捗があったプロジェクトがいくつかあります。一つは新しい五橋キャンパスに設置したラーニング・コモンズです。土樋キャンパスには東日本随一の規模のラーニング・コモンズがありますが、その1.5倍の規模になります。アクティブラーニングの授業ができるスペースを設置しており、多くの学生に利用されています。また、昨年からは学生の学修効果を高め、教員の教育成果を可視化して学びの質を向上させるために、eポートフォリオ「TG-folio」を導入しました。DX人材育成のためのAIデータサイエンス教育についても力を入れており、TGベーシックにおいて、「東北学院大学数理・データサイエンス・AI教育プログラム」を展開しています。他にも、コロナ禍前後でアクティブラーニングの授業の数が2倍以上に増えたり、双方向授業の数が約3倍に増えるなど、コロナ禍を機に大学運営をDX化に向けて見直したことで、学修成果の可視化や教育の質保証の面で一歩進むことができたと思っています。

地域貢献に関しては、文部科学省「デジタルと掛けるダ



ブルメジャー大学院教育構築事業「Xプログラム」に選定され、経済学の知識に加えて、データサイエンスのスキルを習得した修士取得者が、東北地域の持続可能な活性化に貢献することを目的として、地域の企業を巻き込んだ計画を進めています。

**松田** コロナ禍への対策に苦勞する一方でそれを機にDX化を推進し、5類移行後は通常のキャンパスライフを取り戻そうとする一方で良い変化は残す。そうした努力を各大学が続けられてきたことを実感しました。現在はコロナ禍以前の状態に戻りつつ、新たな段階に入っていくところだと思っています。これからも皆さんと情報を共有しながら、今後の大学の在り方を考えていきたいと思えます。本日はありがとうございます。

